

今後のがん医療の課題と、疑似科学的物語で放射線による健康被害を過小評価している問題について、

ラディカルな思考視点を提示する好書。

知られざる放射線の光と闇が 明らかにになる！

西尾正道 著

国立病院機構 北海道がんセンター名誉院長

患者よ、

がんと賢く闘え！



放射線の光と闇

定価 1,728 円(税込)

A5 判/272 ページ

医者、看護師、医療関係者も必読の一冊

- 第Ⅰ部 放射線の光の世界を求めて—がんと賢く闘う
- 第Ⅱ部 放射線の影の世界を考える—核汚染の時代を生きる
- 第Ⅲ部 日本の医療と健康問題を考える

西尾正道著 がん患者3万人と向きあった医師が語る 正直ながんのはなし /1512 円
既刊好評書 がんセンター院長が語る 放射線健康障害の真実 /1080 円

注文書	患者よ、がんと賢く闘え！ 定価(本 1,600 円+税) A5 判並製/272 頁 I S B N 978-4-8451-1518-1	ご注文 冊	ご予約・お求めは 書店へ
	〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 544 (株)旬報社じゅんぽうしゃ FAX 03-5579-8975		

自著紹介 『患者よ、がんと賢く闘え!』

北海道がんセンター 名誉院長 西尾 正道

第二次世界大戦をはさむ70～80年前から、科学・医学・技術は劇的に進歩した。この進化は長い人類史の中でも特筆すべきものである。1938年に原子核分裂が発見され、1953年にはDNAの2重螺旋構造が発見された。それにより、大量殺戮兵器の開発と遺伝子レベルでの医学研究や遺伝子組換え技術が世界を造り変えようとしている。こうした科学技術は光と影の世界があり、使い方によっては、バラ色の夢の世界を創出するだけではなく、人類滅亡へと繋がりがねない負の側面を持っている。これらの科学・技術は人類のために使われるという崇高な理念ではなく、現実には金儲けの手段として使われているため、不都合な負の側面は隠蔽される。その代表的なものが放射線の健康被害の問題であり、また農薬や遺伝子組換え技術の人体への危険性である。企業の広告料で経営を維持しているテレビや新聞などの大手メディアは企業に不都合な真実の情報は報じない。こうした中で国民の世論や価値観は操作されている。

約40年間放射線治療医としてがん治療の領域で放射線の光の世界を求めてきたが、2011年3月の福島原発事故後は放射線の健康被害について考える機会となった。20世紀後半からは人類は放射線との闘いの時代となったが、核兵器開発や原発を稼働するために、放射線の健康被害という裏の世界の真実は隠蔽され、科学的とは言えない理屈で国民を騙し続けています。

急増している小児の発達障害の最大の原因は現在最も普及しているネオニコチノイド系農薬が絡んでいることが解明され、さらに最近には発がんや認知症やうつ病との関係も報告されるようになっていきます。そして福島原発事故後には国家の愚策による縦被曝国家プロ

ジェクトが進行しており、国民の健康被害が危惧されます。

こうした放射線や農薬などの多量複合汚染による環境悪化のなかで、がん罹患者数は年間100万人を越える事態となり、原因が解明されていない指定難病も330疾患に増加しています。こうした現代人の健康問題を抱え込みつつ、私たちは今、高騰する医療費問題や、認知症を伴う高齢者の問題にも向き合わなければなりません。

本書の第1部は私が支援している「市民のためのがん治療の会」の活動や日本のがん医療の問題を論じました。また第2部では政府や行政が原発事故対応の根拠としている国際放射線防護委員会(ICRP)のインチキな放射線防護学について論じました。疑似科学的物語で放射線の健康被害を過小評価して核兵器製造や原子力政策を行っている問題を、放射線治療を生業としてきた臨床医の実感から、そのインチキさをラディカルに考えてみました。

科学性をもった正しい知識で放射線を利用することが重要なのであり、がんが多発している日本の現状を病因論も含めて考え、自分の命をどう守るかを考える一助となればと思います。

